日系カナダ移民史（その2）
吉田慎也の生涯

菊　池　孝　育

はじめに

第2次大戦前，カナダ，日系社会で指導的役割をはたした吉田慎也という岩手県出身者がいた。彼の名前はブリティッシュ・コロンビア州（以下BC州）スティブストンの街路の名として残っている。リッチモンド市スティブストンの地図を開くと，No. 1 RDの南端のSTEVESTON HWYとMONKTON STのほぼ中間辺りにYOSHIDA CTがある。リッチモンドの市勢発展に寄与した彼の業績を讃え，市当局が名付けたものである。日系人の名で公式なカナダの地名として残っている例は，IkedaとかOyama等あるが数少ない。ちなみに吉田慎也の後，日系漁業者の指導者であった林林太郎氏の名もHAYASHI CTとしてYOSHIDA CTの近くにある。林氏は彼の代表的著作「黒潮の涯に」の中で慎也の思い出を次のように記述している。

> 吉田慎也氏の厳父は奥羽の豪族，伊達氏の支藩であった水沢の家老職であった。2•26事件の犠牲となった斉藤内府（元首相）はこの水沢藩の給仕をしていたと伝えられている。 今城総領事は「吉田さんには長者の相がありますね」と言われたが，生まれながらに備わった人品骨柄とも言えるのではあるまいか。それがどうしてカナダくんだりまで流れてきて，ステブストンのような田舎町に住みつくようになったのか，生前あれ程懇意にして頂ながらそこまで立入って伺わなかったがここに来られてからも漁師仲間の子弟に「日本語」や「英語」の教育を率先してやられたのはその「人柄」を物語っている。…（略）[1]…

水沢は幕末から第2次大戦前まで幾多の逸材を輩出した。吉田慎也もその逸材の一人に入るのではあるまいか。だのに出身地水沢でさえあまり知られていない。しかし外国の地名として後世に名を残した人物は，水沢では彼だけである。

1．水沢時代

吉田慎也の生い立ちについては，慎也の甥にあたる吉田茂志氏（91歳）[2]の記憶と残っている資料を総合すると次のとおりである。

慎也は1982年（明治15年）1月24日　胆沢郡水沢町塩竈116（現水沢市新小路24の1）で士族吉田源三次男として出生した。長男豊（みのる）の長子が健在の茂志氏である。父源三は，水沢藩留守家の重職（弐番着座）を務めていた吉田権兵衛の嫡子にあたる。

慎也は青少年時代を水沢で過ごす。水沢尋常小学校高等科を卒えると海外雄飛の志を立て，働きながら着々と準備を整える。明治の激動期に没落した武士階級の子弟は，日本全体が深刻な経済不況に見舞われている時，国内での前途に光明を見いだせないでいた。殊に凶作で喘ぐ東北の農村地帯では早くから海外へ出稼ぎ移民の形で渡っていた。慎也の海外雄飛はきわめて現実的選択だったのである。

近くの吉小路に，下飯坂武太郎，武次郎の兄弟がいた。兄弟は水沢藩士（弐番御召出）下飯坂竹之進の子であった。二人とも慎也よりもはるかに年長であった。武太郎は1887年（明治20年）頃アメリカに密航した[3]。当時アメリカ大使館駐在武官であった斉藤実を頼って渡航したと推測される。水沢の青少年にとって斉藤実，後藤新平は憧れの的であった。斉藤実は1884年（明治17年）にアメリカ留学と駐在武官を兼ねて渡米し，1888年（明治21年），ヨーロッパ経

由で帰国している。

弟武次郎も渡米した兄の影響を受け，水沢英語学会を主宰[4]し，青雲の志を持つ同志とともに英学に精励する。慎也がその一員であったかどうか定かではないが，ごく親密な関係にあったことは確かである。のちに武次郎も兄を頼って新大陸に渡る。現在の合衆国であったか，カナダであったか不明だが，いずれ慎也がサンフランシスコからカナダに渡った時は，バンクーバー近辺で木材の伐採や運搬の仕事に従事していた。胆沢郡史によると，慎也が渡米したとされる明治33年には，英語学会会長としてまだ水沢にいることになっている[5]。カナダに渡った時期は，慎也がまだサンフランシスコに滞在中だった頃と推察される。

1895年にカナディアン・パシフィックの定期船が横浜ーバンクーバー間に就航する。それまでBC州内に約1,000人ほどの日本人がいたが，その後急激な増加を示し，1896年から1900年までの5年間に，12,788人にものぼる日本人がカナダの土を踏むことになる[6]。その殆どはBC州内での鉄道工事及び鉱業，バンクーバー近辺での木材伐採・運搬・製材，スティブストン周辺での漁業などの肉体労働に従事していた。

茂志氏は，慎也は1900年（明治33年）11月サンフランシスコに渡ったと記憶している。この年は出稼ぎ移民を志すものにとって，渡航には特に厳しい状況の時期だった。サンフランシスコでは怒濤のように押し寄せる日本人に対して，排斥の火の手があがった時期だったのである。

アメリカ本土における「日本人排斥決議」第一号の模様は，つぎのようであった。

「…（前略）…日本人労働者の増加に注視の目を向けるようになった。1900年5月7日桑港労働同盟会は，太平洋労働同盟と結びつき同日市民大会の名のもとに会合し，市長フィラン及びスタンフォード大学教授ロス等を中心として演説会を開き，日本人排斥を決議しこれが日本人排斥決議の第一号となった。」[7]

無一文の移民多く，トラブル多発

近来外国出稼人の数ますます増加し，そのため到る処日本人労働者排斥の声を聞く…(略)…多数の出稼人の多くは，ほとんど着のみ着のままという有様ゆえ，その困難名状すべからず，始め本国出立の際は，米国に入りこまんとの志なりしも，米国入国の際は，保証金30弗を所持せざるべからざるが故，中には晩香坡より密航を企ててその筋に捕縛せらるる者あり，この先いかになり行くべきかと，我が当局者もほとんど当惑の体なり[8]。

1899年（明治32年）暮れからハワイにペストが発生して，予防のため日本・中国人街を焼き払うという事件が起こった。日本人だけで約3,600人もの罹災者が生じたといわれる。

国外の厳しい状況を勘案して，日本政府はアメリカ及びカナダ移民の渡航を制限する措置を取った。

このような事情で，1900年（明治33年）4月には移民の渡航制限をし，その人数を減らすよう外務大臣より司令して，月に全国で1,530名としたが，同年5月にはさらに，情勢は「そのように甘くない」と判断し，すぐに先の人数を全国で299名と大幅に削減して各県別に割り当て，月に多い県で10名，少ない県で4名とした[9]。

このさなか慎也がどういう方法で旅券を取得し，どんな経路でサンフランシスコに渡ったのか知る由もないが，当時海軍次官であった斉藤実の助力があってこそ，渡航が実現したと考えられる[10]。斉藤実は慎也にとって郷土の大先輩であると同時に，またいとこという近い親戚関係にあったのである。

2．サンフランシスコからカナダへ

1897年（明治30年）に東洋汽船がサンフランシスコ航路を開設しているので，横浜からこの便を利用したものと思われる。17日から20日の日数を要し，料金は60円ほど（下等）だった。当時移民一人あたりの渡航総費用は120～150円ほどだった。農家一戸当たりの月収が3～4円といわれる時代だけに，相当多額な費用であった。上陸時に厳しい身体検査が課せられた。明治時代の日本の保健衛生は極めて劣悪だったので，トラホームや皮膚病などの疾病で上陸を拒

否されるものは後を断たなかった。特にサンフランシスコの検疫医と移民官は厳しいとされ，健康に自信のないものや，渡航目的がはっきりしないもの（売春婦，犯罪者，契約労働移民＝1885年以降入国禁止）は，シアトルとかビクトリアといった比較的検査の緩やかな港を選んで上陸した。慎也は問題なく上陸できた。

上陸した日本人は，たいてい日本人経営の旅館に滞在して，仕事の斡旋を受けるのが常だった。地理不案内であることはもちろん，英語を話せなかったからである。サンフランシスコで慎也はアメリカ人の家にハウスボーイとして住み込んだ。働きながら英語を習得するためだった。旅館で斡旋されたのか，斉藤実とか下飯坂兄弟に紹介されたものか不明である。

18歳の慎也の賃金はいくらだったのか。当時の日本人の最低賃金は10時間労働で1ドル～1ドル50セントだった。住み込みなのでせいぜい50セントくらいだったのではあるまいか。

多くの日本人は大きく二つのタイプに分かれた。一つはなりふり構わず働いてせっせと日本に送金するタイプと，もう一つは酒と女と博打にのめり込み，その日暮しの生活を送るタイプとであった。

慎也はそのどちらにも属さない苦学生タイプの日本人であった。というのは後年カナダの日系コミュニティの指導者として，人に尊敬され人を魅了した高邁な人格と深い教養は，このサンフランシスコ時代に身につけたものと考えられるからである。ここで3年程，苦労しながら英語と欧米的教養を身につけたに違いない。

1895年（明治28年）当時のサンフランシスコの日本人在留者は約7,000名で，5,000名が純然たる出稼者，1,300名が家内労働をしながら修学するもの，その他醜業婦500名などとなっている[11]。慎也の渡航は5年後の1900年なので，在留者はほぼ倍近くになっていたものと思われる。家内労働しながら修学する日本人青年の数も3,000名に近い数字になっていたのではあるまいか。

いくばくかの貯えのできた慎也は，1903年（明治36年）頃カナダ目指して北上する。下飯坂武次郎との文通は続いていた。武次郎を頼っての北上であった。たぶんサンフランシスコ港から海路バンクーバーに向かったものと思われる。武次郎はバンクーバー郊外で木材関係の仕事に従事していた。1926年（大正15年）武次郎はバンクーバー市内に居を構え，慎也と一緒に自宅の庭園で記念撮影した。その写真を茂志氏が保存している。写真の裏には毛筆で，武次郎の住所をバンクーバー，マリンドライブ，1771と記してある。当時の住所録によると，同番地には，下飯坂武次郎という名はなく，代わりにJapaneseとなっている[12]。武次郎であったことは間違いない。バンクーバーに着いた慎也は武次郎にあったのち，スティブストンに向かう。1902年に鉄道が開通していた。

当時のスティブストンでは季節的に大量の労務者を必要とした。手っ取りばやい仕事としてスティブストンの鮭漁に飛び込んだのかもしれない。スティブストンの日本人漁師は殆どが三重県を中心とする西日本出身者が多かった。その中に若干の宮城県人も混じっていた。その宮城県人も登米郡など北上川流域の出身者であった。明治の廃藩置県の行政区画が猫の目のように変わった一時期，宮城県北地区から岩手県南地区にかけて水沢県が置かれたことがあった。旧藩時代はともに伊達家の版図だっただけに，その地域出身者には当然同郷意識があった。カナダにおける最初の岩手県人会が水沢立生会と称して宮城県出身者が役員を務めた事実からも推測できる。このことから同郷の知人を頼ったとも考えられる。それに水沢は古くから漁網の生産地として知られ，北上川の舟運を通じて宮城県の漁業と深いつながりを持っていたのである。あるいは慎也はその“つながり”を頼ったのかもしれない。

いずれにしてもスティブストンに落ち着くことになった。茂志氏によれば，漁業に従事することになったのである。

3．スティブストン

1909年（明治42年）の記録[13]によると当時のスティブストンは次のとおりであった。

スティブストンはフレーザー河の河口に位置

している。フレーザー河は鮭の宝庫であった。昔はインディアンの食用に供せられるだけであったが，1876年（明治9年）に白人が缶詰製造業を始めてから，急激に鮭漁が盛んになった。日本人が初めてここで鮭漁に従事したのは1888年（明治21年）で，和歌山県三尾出身の工野儀兵衛であったといわれる。彼はフレーザー河の鮭の大群を見て故郷に急報し若者を呼び寄せたといわれる。以来日本人の数も急激に増加し，1894年（明治27年）以降は4,000人以上の数に達する時もあった。1901年（明治34年）以降は不漁が続いたが，不漁の年でも1,000人以上の日本人が鮭漁に従事し，大漁の年は2,000名を超えたといわれる。その日本人漁師は徐々に居住地をスティブストンに定めるようになっていった。出稼移民から帰化定住移民へと変わっていった。その理由は1892年（明治25年）に定められたBC州規則によって，カナダ領海での漁撈には，英国民に発給される「漁撈ライセンス」が必要となり，日本人漁師は便宜上帰化しなければならなくなったからである。カナダ国内に3年以上居住しなければ帰化権を取得できなかった。

フレーザー河畔において我が同胞漁者の永住的居住地をスティブストンとす，スティブストンは其下流における最も人家稠密の漁村にして晩香坡市を距る12哩の地にあり，人家総数約330戸，内200戸は白人の家屋（商業家，農業家及び鮭缶詰所に関係を有せる者の家屋等を含む）約100戸は日本人漁業家家屋，又た約30戸は支那人の住家なるが，漁期に至れば数千の漁夫は各地より此地に蝟集し来るなり，就中我同胞漁夫は他の漁夫に卓絶し今や同河漁者の約6割を占め居れり，されば晩香坡市を始め付近一帯の地における在留同胞の栄枯消長は，実に同河における獲漁の多少に比例すと云うも決して過言には非ず[14]。

1897年（明治30年）日本人では初めての職業組合であるフレーザー河漁師団体がスティブストンで結成された。日本人病院の維持管理と相互扶助が目的であった。

1900年（明治33年）6月29日BC州政府の正式認可を得て同団体を財団法人「フレーザー河日本人漁者慈善団体」に改編し，新発足した。

初年度（1900年）の構成員は3,419人で，1901年（明治34年）度は3,471人と増加している。慎也がスティブストンにきたと考えられる年の1903年（明治36年）度には1,860人と減っている。その翌年度には1,000人の大台を割り，883人になってしまう。これは当初，帰化した日系人と日本人を区別しないで構成員としたが，1902年度からは帰化人のみをもって構成することになったためと考えられる。

然して同団体の目的に二者あり，即ち一は在留同胞漁者の利益を助長すると共に相互の親睦を計り，外白人に対して其利権を伸張し以て在留同胞の根底を強固ならしむるに在り他の一は天涯の孤客若し病魔に犯されて病床に呻吟する事ある時は，直ちに収容して是に慰謝を与へ無料にて診療施薬し以て患者の疾病を除去するに在り，…（中略）…

同団体の名称は団体創立当時は是を「フレーザー河日本人漁者慈善団体」として州庁の認可を得たりしものなるが，同漁夫は前述の如く英国に帰化し一旦英国臣民となりたる者なれば殊更に「日本人」なる語を冠するは甚だ不当なりとなし，同団体臨時総会において討議したる結果，遂に昨年度より是を「スティブストン漁者慈善団体」と改称せり[15]。

この改称は1908年（明治41年）のことであった。この頃になると慎也は既に帰化してカナダ市民権を取得し，団体員として着々とその地歩を固めつつあった。市民権取得は1905年（明治38年）頃と見るのが妥当であろう。というのはこの年になって，初めて慎也の名前が記録されるようになるからである。

岩手県人会　水沢立生会（明治38年9月）

明治38年9月晩香坡在留の岩手県人有志相集まり「水沢立生会」を組織せり，郷人の和親と啓発と保護とを目的とし，市内第5街2013番地に3500弗を投じて家屋並びに土地を購入し，以て会員の寄宿所に当てたり。会費は毎月1弗，現在会員35名，基本金約500弗を有す。（理事兼会計）阿部松之進氏，（監査役）吉田慎也氏当選し何等特殊の規約を制定せず専ら会員の自活的精神に準拠して会務を運用しつつあり[16]。

バンクーバー在留岩手県人は，バンクーバー

市内居住者は勿論，ニューウェストミンスターやスティブストン地区の住民も含んでいたと考えられる。また岩手県人会と称しても現在の宮城県北出身者も入っていた。阿部松之進も宮城県栗駒郡岩ケ崎出身である。彼はのちにカナダ日本人会会長になる。

宮城県人会は岩手県人会に遅れること3年余り，明治41年11月10日に誕生している。当時の県境にはこだわらず，水沢県時代の版図（宮城県本吉郡，登米郡，栗駒郡は水沢県に含まれていた）か旧藩時代の藩境で同郷の範囲を決めていた。慎也はスティブストンの同郷人の代表格で役員に名を列ねたものと思われる。

慎也がスティブストンにやってきた1903年(明治36年)頃は白人漁者による日本人漁者排斥運動が猛烈な高まりを見せた時期であった。1900年（明治33年）の漁価をめぐる日本人漁者と白人漁者の対立は，翌1901年の両者の暴力抗争にまでエスカレートしたのである。この多難な時期にスティブストン入りして，わずか数年の内に慎也はスティブストンの日系社会のなかで頭角をあらわし，漁者慈善団体の指導者の一人となる。

1907年(明治40年) 9月のバンクーバー暴動[17]に象徴される西海岸一帯の排日運動の高まりのなかで，スティブストン日本人漁者慈善団体は1908年(明治41年)11月25日の総会において，その名称から「日本人」を削除し，「スティブストン漁者慈善団体」と改称するに至った。その理由は，前述のとおり，帰化した漁者で組織しているのであるから「日本人」を名乗るのが不適当である，というものであった。排日運動の高まりに配慮したものだった。

同じ年の同団体の年度当初の総会において，慎也は5人の監査役の一人として選任された。弱冠26歳であった。日本を出てから8年の歳月が過ぎていた。

4．活動の軌跡

1）1908年（明治41年）

スティブストン漁者慈善団体監査役に選任される[18]。上述の団体の名称変更について，公証人の手を経てビクトリアの州政府に申請書を提出することが慎也の初仕事となった。

2）1909年（明治42年）

2月15日の団体総会で，監査役に再任された[19]。任期中に手懸けた主な仕事は以下の通りである。

①漁者団体の基本財産の設定
②小学校設立計画の策定
③漁価の値上げ運動
④日本政府に対する塩鮭輸出への減税請願
⑤漁者団体の経営の安定化
⑥大日本帝国海軍練習艦隊歓迎

4月4日の臨時総会において同上歓迎委員会の委員に選任され，バンクーバー在留同胞と共に歓迎の大役を無事成し遂げた。海軍次官の親戚ということが大きくものを言った。

3）1910年（明治43年）

監査役筆頭に選ばれる[20]。

①今年度より各重役に報酬を支払うことに決定。
②漁価が例年より高く漁者団体の経理も順調に推移した。
③同年9月の臨時総会で尋常小学校を設立して病院と同様に漁者団体付属として経営することに決定。創立委員に選任[21]される。小学校設立に尽力した。1488弗の設立寄付金を集める。
④病院・学校の建物に火災保険を三年分前金で掛ける。

4）1911年（明治44年）

監査役に選任される[22]。

①同年3月尋常小学校開校
②病院事業800弗の赤字，団体員の寄付金で処理。

5）1912年（明治45年～大正元年）

監査役再任となる[23]。

明治天皇御崩御。

6）1913年（大正2年）

副団体長兼病院監督に選任される[24]。時に31歳。

①漁価交渉で指導性を発揮。

漁者団体の最も重要な任務は年度ごとの漁価の交渉を各缶詰会社と行なうことであった。その交渉は例年難航するのが常であったが，特にその年は豊漁が予想されたので最後まで難航した。漁者団体はストも辞さない強硬な態度を貫き缶詰製造業者側と対峙した。6月30日から8月中旬にかけてのマラソン交渉は以下のような状況であった。

…（前略）…団体長佐々木長作，及び副団体長吉田慎也の両氏其儀（漁価交渉）に與かれり。…（略）…両氏は此処に時価25セントたるべきを要求せり。…（略）…バーカー氏亦大に其高価の故を責め，我が要求の採用は甚だ困難なるを感じたけれども，主張は飽く迄貫徹するに努め，…（後略）…[25]

東北人らしい粘り強さでなんとか交渉をまとめあげ，団体員の信頼を勝ち得たのであった。

②小学校増築及び病院修繕

7）1914年（大正3年）

副団体長兼病院監督に再任される[26]。

①団体規約の改正

②病院手術室の整備

③学校増築と病院整備の事業完了に伴う会計報告

④東北飢饉及び九州災害救済費寄付募集と送金（720弗95セント）

⑤カナダ出征軍人家族扶助寄付金募集

第1次大戦時にカナダ軍として175名の日系義勇兵が欧州戦線に参戦した。その留守家族の扶助を行なったのである。参戦の動機は「カナダ社会で被差別者である日系人の市民権獲得と差別の障壁の打破」のためだった。175名中147名の死傷者をだした。そのうち実に54名が戦死した。高価な代償だった。しかも1949年まで何ら報われることがなかった。

8）1915年（大正4年）

3月14日の定期総会において三たび副団体長として選任されるが，間もなく辞任した。辞任の経緯については次のとおりである。

本団体創立以来，未曽有の紛擾，今春定期総会当時に於て端なく勃発して以来，是に胚胎する諸種の事件紛々百出して煩雑を極む。…（略）…

三月一四日定期総会において役員選挙を行ない（団体長）佐々木長作，（副団体長）吉田慎也，（会計）下野五郎吉，（監査役）稲名市五郎，中田辰松，中西悦之助，山本次郎松，山本岩蔵の諸氏当選したるが，佐々木長作，吉田慎也，下野五郎吉の三氏は団体事情の関係より辞職せられ，四月四日の評議員会はその辞任を認容する事となり，四月九日臨時総会を開きて全役員改選の結果左の諸氏当選せり。（団体長）大出竹次郎，（副団体長）中西悦之助，（会計）山本岩蔵，（監査役）山本次郎松，稲名市五郎，小田茂三郎，谷野卯八，尾浦久吉

次で副団体長中西悦之助氏は或る事情の下に辞職する事となり，評議員会に於て上野長太郎氏を補欠選挙せり[27]。

この結果慎也は野に下る。1919年（大正8年）同団体長に推戴されるまで，雌伏の4年間を送ることになる。

役員のうち三役が辞任して全役員を改選しなければならないような“未曽有の紛擾”とは一体なんだったのか，次章で詳しく考察してみたい。

5．保証権をめぐる紛擾

1889年（明治22年），バンークーバーに日本領事館が開設された。領事館の人員不足や予算上の問題から，在留邦人の諸証明に関わる調査，保証，書類作成などの事務処理をスティブストン漁者団体に委任していた。当時スティブストンがカナダ随一の日系コミュニティであった。在留同胞の団体としても漁者団体が一番大きかった。漁者団体は領事館委託業務（保証権）による手数料収入によって，病院経営や学校経営の不足分を補塡することができた。と同時に在

留邦人の秩序維持に睨みを効かすこともできたのである。

無秩序，無整頓のパイオニヤー時代にはこの証明の代行を在留民の集団である有力な団体に委任することとなった。徳川時代に地方の豪族乃至は博徒の親分に十手，捕り縄を預け治安の取締を計ったのと同巧異曲である[28]。

ところがかつてスティブストンで漁者団体の創立役員であった山崎寧（和歌山県三尾出身）がバンクーバーに移り，1908年（明治41年）から「大陸日報」（明治40年創刊）の経営に乗り出した。傍ら1909年（明治42年）「加奈陀日本人会」を組織してその会長の座に坐った。彼が同会の財政基盤確立のために狙いをつけたのが，日本領事館の委託保証業務だったのである。彼は「加奈陀日本人会」こそカナダ日系人の統一団体であると，歴代の領事に吹き込み，保証業務の代行権を漁者団体から同日本人会に移すことを画策してきたのである。

1915年（大正4年）突然，阿部嘉八領事が，保証権を直ちに日本人会に委譲するよう漁者団体に通告してきた。

保証専属権は，久しく在晩香坡帝国領事館と加奈陀日本人会との懸案なりしが今春3月定期総会当時より前記日本人会へ専属権を付する議あり。本団体中の所謂反対派は既得権（実は然らず）を主張して止まず[29]。

漁者団体は大混乱となった。山崎は自分と同郷の三尾出身の有力者をバンクーバーの料亭に呼び，阿部領事ともどもスティブストンの反対派を切り崩す策を練ったといわれる。

これ等の人々は帰村後当時の団体重役，特に佐々木団体長に報告相談していたら問題はアレ程紛糾しなかったかもしれないが，彼らは急遽団体規約を楯に，抜き打ち的に特に三尾村人の多いキャナリー在住の団体員三分の一以上の署名をとって佐々木団体長に臨時総会開催の要求書をつきつけた[30]。

臨時総会は賛成派，反対派入り乱れて紛糾，取っ組み合いの乱闘にまで発展した。休憩後の採決で反対派が僅少差で破れ，佐々木団体長以下幹部の総辞職となった。以後スティブストンは二派に分かれ，道で会っても口を利かぬほど異常な状態となった。

「三尾を制する者はスティブストンを制す」策士山崎寧の画いたスティブストン懐柔，切崩しがモノの見事に効を奏したわけである。彼はヒソカにペロリと赤い舌を出したことであろう。この騒動は阿部領事が晩香坡を去り浮田卿次領事が来任して仲裁の労をとるまで二ケ年半つづいた[31]。

翌1916年（大正5年）3月6日，佐々木前団体長をリーダーとする反対派は新たにBC漁者団体を設立[32]して真っ向からスティブストン漁者慈善団体と対立する。慎也は行き掛り上旧役員と行動を共にしてその職を辞したが，BC漁者団体の誘いにも乗らなかったし，従来の漁者団体にも組しなかった。同年3月18日に開かれたスティブストン漁者慈善団体の定期総会で監査役として選出されたが，山本次郎松と共に辞して受けなかった[33]。

その後何ら役職肩書きがないにもかかわらず学校等の式典には来賓として必ず招待された。反対，賛成両派からその人格力量を高く評価されていた証拠といえる。この件にあっては，慎也はカナダにおける日系人全体の大局的立場から両者の仲介と調停に奔走したのである。

6．事業への進出

7年間にわたる漁者団体の役職を辞した慎也は，魚類の仲買いと農業関係の会社設立に動きだす。魚類の仲買いの方はバンクーバーで魚屋を経営していた阿部松之進と協力しながらスティブストンの魚類の販路を広げた。

甥の茂志氏によると，吉田商会を設立して，塩鮭や筋子を日本に輸出した，となっている。それで慎也は頻繁に日加の間を往復したとのことである。たぶん阿部松之進の協力があって可能だったことと思われる。二人で水沢立生会を運営しながら，同郷の後輩の面倒をみてきたの

である。

阿部松之進などと言うとサムライを連想するようなイカメシい名前であるが，パウエル街の二百番台で魚屋をしていた通称「魚松」で通っていた威勢のいいオッサンであったが，日本人会歴代会長の中でも一番筋の通った会長であったように思う[34]。

魚類関係の事業はこの段階ではまだ緒についたばかりであった。“鮭大尽”などと京浜地区や郷里水沢でもてはやされるのは1930年代になってからである。

1915年（大正4年）下野と同時に，モンクトン通りと第2号ロードの角に7エーカーの土地を購入した。やがて18エーカーを借りて合計26エーカーを耕作して農業経営を始めた[35]。彼が農業経営を始めるにあたって次のように述べている。

ステブストンは漁業地であるが，漁業ばかりでは浮き腰でいかぬ。ステブストンで御厄介になり，生活していても，少し余裕があればその金で日本へ行くとか，他に行くというのは，全然不心得である。ここに落着いて永住の方針をたてて行かなければ，万事がよろしくない，私は永住の覚悟を決めて腰を据え農業を始め，同時に魚の仲買いをしている。この国生まれの青年は土着であるから，私はそれらの青年に知己を得た気がする。私は先輩に当地に止まるよういくら勧めたかもしれないが，帰った人が多い[36]。

当時ある程度の金を貯めたら故郷に錦を飾るか，せっせと故国に送金してある時期には帰国するといった，出稼型の日本人が多かった。そのことがカナダの排日運動の大きな要因であることを慎也は知っていた。漁業ばかりでは，ふらふらして出稼根性は抜けない。がっちり大地に根を生やして永住の覚悟を決めるには農業が良い，といっているのである。彼には先が見えた。排日の嵐が吹き荒れる中で日系人はどうあれば良いか，真剣に考えた。

この考えを敷衍して，のちに彼はステブストン農産会社を興しその社長となる。

さらにこの時期に妻を郷里から迎え，一家を構えた。名をサウラといい，江刺米里の佐賀太蔵の妹で，慎也には従妹の関係にあった。1918年（大正7年）のスティブストン漁者団体員名簿に吉田慎也，吉田サウラと並んで載っている[37]。

7．再び漁者団体役員に

保証代行権騒動は漁者団体の分裂という最悪の結果になったが，1917年（大正6年）に浮田領事の仲介で決着を見たことは前述のとおりである。スティブストン漁者慈善団体は再び統一団体として機能し始めたが，内部には依然として分裂時の残滓が散見され，ぎくしゃくした運営が続いていた。7月の木場団体長，山本会計，谷野病院監督等の辞任[38]がその一つの例である。

更に外には，排日運動の激化のさなか，白人漁業者との話し合い，漁業資源の枯渇現象への対処等，難問が山積していた。

1919年（大正8年）の定期総会で慎也は団体長に選出された[39]。37歳になったばかりだった。

その年の団体長としての慎也の最大の功績は白人の団体であるBC漁者保護協会との友好・提携関係をまとめあげたことである。この白人の協会が日本人排斥決議を発表した直後の対応策だった。1920年（大正9年）1月26日のBC漁者保護協会に出席した慎也は，日本人会の信夫幹事の通訳で次のように演説した。

白人及び土人の漁者諸君に演説を為すの機会を得たるは光栄なり，今後は漁業事情改善の為に有らゆる方途に於てビー・シー漁者保護協会の提携を望む，フレーザー河の名をビー・シーに改められたるは，大いに慶祝すべく，ヂヨージア湾よりアラスカに至る総ての漁者を包容せんことは余の希望なり，過去に於て白人及び土人漁者より日本人漁者は幾多の批評を浴びせられたり。然しながら日本人は善良なる加奈陀市民たらんことを専念し，移住国の市民との同化の為に努めつつあり，吾々は英国臣民と為りしが為に日本に於ける権利を喪失したり。白人諸氏と調和し提携することは吾人の福利なり。其第一歩として，日本人は児童に英語教育を施すの方途を採る傾向に赴きつつあり[40]。

そして協会の運営費補助として100ドルの小切手を贈った。白人協会側も相争う愚を避け友

好・提携の方策を採用することになった。これを受け同2月14日の漁者団体の定期総会では学童教育方針に関する学校改革問題を論議し，

「従来の方針に従い是を継続し，日本語の教育科目を減じて更に英語時間を増加する事とし成るべく白人公立学校に入学せしむるよう奨励の手段を執ること」[41]

と決議した。5年先，10年先の日系人のあるべき姿を，常に念頭に置きながら日系社会をリードした慎也の哲学を色濃く反映している。

1920年（大正9年）も団体長に再任され以後1929年(昭和4年)，時の福間領事と喧嘩して詰め腹を切らされるまで，11年にわたってスティブストン漁者慈善団体長を務めることになる。

8．団体長時代

1920年代は日系移民にとって苦難の時代であった。カナダに帰化したといっても，市民としての権利は依然として凍結されたままであったし，差別と排斥は一段と激化していた。将に困難極まるときに慎也はスティブストンの日系コミュニティの最高指導者であった。

団体長の任務は，現在の日本で言うと，町の漁業組合長と町長を兼ねた職務と考えて良い。能力手腕はもとより，日系人数千人を統括する指導力と人間的魅力がなければならない。その点彼は申し分なかった。

福徳円満，長者の風格を備えた吉田慎也氏…(略)…[42]

だったのである。また慎也の風貌を彷彿させる次のようなエピソードもある。

青年会では毎年十月から五月まで八ヵ月冬季英語夜学校を経営していたが予算不足で悩まされていた。…(略)…漁者団体から補助がもらえないかと団体長の吉田さんに相談すると「非常に機嫌よく応諾されて「補助申請の形を執れ，その際自分としてはできるだけ応援しよう」と約束してくれた。

(青年会長)が予算案を持って出頭すると，「ホホオそんでいくらいります」とソッポをむいて知らん顔をしている。「これは何事かあったナ」と直覚したので，「…(略)…団体長何か夜学校についてお気に入らんことがございましたか」と水を向けたら果たして，

「この間雪の降った晩ワス（わし）はヅムソ（事務所）を出てズドーサ（自動車）のヘッドライトをつけるとズドーサの前の雪の上に大きくCHABINと書いてコール（石炭）のコナ（粉末）をフリかけてあった。あれはタスカに（確かに）夜学校生徒のイタズラにツガイない（ちがいない）。ワスは（ワシは）そんな夜学校に補助など出すのはイヤだ。」因みに吉田団体長は東北弁丸出しでおまけにツルツルの禿頭であった[43]。

時には愛され，親しまれ，そして頼もしがられた慎也の人柄を知る貴重な記録である。

慎也が団体長在任中は多難の時期であったことは前にも述べたが，その中でも日系漁者を排除しようとする白人漁者のユニオン，排斥の立法化を図る州政府ならびに連邦政府に，どう対抗していくかという難問題があった。

日系漁者の削減が加奈陀の法令となって現われてきたのは1922年3月からであるが，吾人はそれより久しい以前から白土人同業者等から其の声を聴かせられており，又地方漁業官と製缶業者等の手加減によりスキーナ，ナースのサカイ漁場を除く外は毎年幾分づつの削減を蒙っていたのである。既に永い間のこうした日系漁者排斥の声が白土人同業者等よりようやく一般的の世論と変わってくるに及んで中央政府も三月閣令を発して西海岸のツローリング漁鑑三十三枚を削減し次いで東海岸の同業漁鑑を以て西海岸に転漁する事及び無鑑札者の領海外の釣漁をも禁止した[44]。

日系漁者は帰化しても選挙権は与えられなかった。政治家は票にならない日系人は無視して白人漁者の後押しをして政治権力を伸ばすことができた。ライセンス（鑑札）削減問題は，単なる日白の対立に止まらず，政治家の介入による日系漁者排除の立法化の問題に発展した。その流れをまとめると次のようになる。

1）1922年（大正12年）の日系人排斥政策は前述のトローリング・ライセンスの削減となって現われたのである。その後毎年削減されることになる。

2）1924年（大正14年）全漁区にわたり日系漁者の諸ライセンスは40％減

3）1925年（大正15年）塩鮭・塩鰊製造業における日系人の排除（1928年までには全員日系人以外であること）

4）全漁区の日系漁者を糾合して「漁業問題対策連合委員会」設置，委員長吉田慎也（スティブストン漁者慈善団体長）

5）1927年（昭和2年）日系漁者はライセンス削減は不当であるとオタワ大審院に提訴

訴訟には当然費用がかかる。慎也はその費用の工面にも奔走しなければならなかった。関係者の寄付はもちろん，加奈陀日本人会や日本領事館の援助も期待していた。

頼みの綱の日本人会「特別会計」はグータラの有象無象によって残骨までシャブられた後であるし，どこをたたいてもお金の出所のない漁対連としては…(略)…[45]

領事館の福間領事に援助を要請した。口が重く水沢弁丸出しの慎也にとって，上手な言い回しはできない。領事館の機密費を少々回してほしい旨率直に要望した。“機密費”という言葉にカッとした領事は「この馬鹿者！」という罵声を浴びせた。これが喧嘩の発端だった。

福間領事は「アンチ吉田」の漁者連を公邸に呼び集め，「…(略)…あんな漁業委員長では役に立たん，早く首のスゲ替えをしろ，それとも皆が領事を頼まないというのであればオレはいつでも引っ込んでもよいぞ」と高飛車に出た。

スティブストンでは尾浦久吉，林広告，山下興作の三元老が吉田慎也を漁者団体事務所に呼びつけて密談半日，「泣く子と地頭」の例を引いて吉田にツメ腹を切らせた[46]。

11年にわたるスティブストンの最高指導者の座を降りたのは1929年(昭和4年)，慎也47歳の時であった。その前年モンクトン通りに新居を構え，永住の決意を益々強固なものにしたばかりであった。

9．ステブストン農産会社

団体長時代の慎也の業績の一つに1927年(昭和2年)のステブストン農産会社の設立がある。その設立の経緯は次のとおりである。これは慎也の口述を文章にまとめたものである。

日系漁者ライセンスの削減は峻烈なる圧迫で二十年，三十年と馴れ親しんだ生業を奪い，家族の扶養にも事を欠き動々とすれば路頭に迷わしむるような残酷なる非人道的なる仕打ちであった。漁業鑑札の削減も初めは整理の形で済まされたかも知れないが，それが二年と経ち三年と過ぐるにしたがって，削減は漸次に深刻を加へ，実に血の出るような悲劇を続々演出し，こうしていれば座して死を待つのみである。どうせ根も葉もなく打絶やされるなら，乗るかそるか当って砕けよという主義から起された運動が彼の漁業問題の訴訟であるが，他方漁業ライセンスを喪失したものを路頭に迷はさしめず，これに対して生活の道を講ずる必要が起り，この要求に応ずるためにステヴストン農産会社なるものが組織せられたのである。

日系漁業のライセンス削減はいうまでもなくステヴストンにのみ限られていない，第二区にも第三区にも及んでいるが，第二区，第三区と事情を異にしてステヴストンの日系漁者は既に定住の根底深く団体，病院，学校，教会その他あらゆる社会的機関完備して動くに動かれない事情の下にあるを以て，漁業ライセンスの権利擁護問題も，失業者救済問題も最も真剣に考えられなければならなかった。ライセンスを失うた漁者を如何にするかの問題は随分頭を悩まされたがいろいろ考えた結果，それ等の人々には最高三百五十弗から最低百五十弗位の救済金を支弁した。ところがその救済金を受けた人からいえば三百弗は一時の間に合わせに過ぎず，それから先き永い生活の真の救済にはならない。一時の気慰みでなく徹底的の救済方法を考究せねばならぬ。今まで慣れた漁業を奪われて，新たに方向を転換し他の職業に企求する手助けをせねばならぬと言うところ迄考えるようになったのである。

ライセンスを喪失する漁者の多くは他の労働に転ずるには余りに年をとっている。又漁者の常として大抵商売には不向きである。そう考えると農業より他に道はない。腰を落付けて家族を養い，子女を教育するにも漁業を止めさせられた人の進むべき道は農業に勝るものはない。

最初失業者の救済問題が起った時は，漁者団体でライセンスの整理委員が挙げられた。整理委員は同時に失業者の救済も扱うもので，農業に着手するような計らいもしたが，これは漁者団体の事業としても良いようなものの余り仕事が大き過ぎ，又団体員の利害関係の一致を欠くために実行困難であることを見出した。そこで救済方法としてセツルメントを起し，一個年の生活費を補助し，道具等も共用で使用すべく支給するようにした。

この救済方法は漁者のライセンスを失った人とのみ限らず，将来フレザー河の鮭が減少して政府は魚族保護の意味からライセンスを削減されるようなことも予想されないでもないので，或は又ライセンスは削減されずとも漁獲の減少によって生活が困難に陥るようなことがあるかも測り知るべからずである。故に将来副業として農業をもたなければならない。漁業が将来不利になった場合に備うるため農業方面に根拠を据えておく必要があるというので，有志の士が相謀りてステヴストン農業会社を創立したのである。それは計画は一九二六年より着手されたが，いよいよ成立したのはその翌千九百二十七年であった。

本会社は株式組織で目下株主六十五名殆ど全部漁者，資本金十万弗である。土地は第九号ロードと第二ロード角二十英加の開墾地を一英加当り三百九十弗で購入しその外にスカッチ，キャナリーの堤防に沿う開墾地二十英加を一英加五百二十弗宛で購入した。外に第一号ロードに七英加半これは一英加当り四百八十弗である。以上払込みは会員の株金を以て充て第一回は四分の一を支払いその他は四箇年間に全部払込むことになっている。

本会社の目的は利益が主でなく救済を本位とするつもりであるから，今後漁者ライセンスを失って農業を希望する者があらば土地及び資金を貸付けることになっている。失業して転ばぬ先の杖である。現在耕作に従事するもの七組あり，作物は苺類，野菜類で他に養鶏等をもやっている。会社の幹部は左の如くである。

会社長　吉田　慎也氏
副会長　小柴　民五郎氏
会計　疋田弥左衛門氏

ステヴストン農産会社の規約大要左の如くである。
…（略）…[47]

長い引用となったのは，この文全体に慎也の正確な情勢分析と優れた先見性が色濃く滲みでているからである。

カナダにおける漁業の先細り傾向に不安を抱いた慎也は，1914年（大正3年）には土地を購入して，農業に乗り出したことは先に述べた。その時はあくまでも個人的発想であったが，不安が深刻な現実の問題となった団体長時代には，日系コミュニテイ全体の問題として農産会社設立に尽力した。

出稼ぎではいけない，カナダに同化して定住しよう，というのが慎也の主張であった。そして日系人定住のための基盤を築くことが彼の夢であり，その夢の実現に全力を尽すことが，彼の団体長としての使命感であった。

しかし彼の先見性をもってしても予測できなかったのが，太平洋戦争の勃発による“スティブストンからの日系人追放”と“財産の没収”であった。

吉田氏はステブストン漁者慈善団体長であり漁業問題代表委員であり，又ステブストン農産会社長として公共のため大いに尽力しつつある。御大礼奉祝の昭和三年秋美しい住宅を新築して永住の基礎を据えている[48]。

壮大な豪邸[49]と美しい夫人はスティブストンでは誰一人知らないものはなかった。子宝に恵まれることはなかったが，円満な家庭で夫人ともども日系社会の信望の的であった。

彼（慎也）は青年を愛し我々はいつも自宅に招かれて御馳走になったが，夫人は高貴な感じのする美人で文字通りの内助者であって外部に出しゃ張らなかった[50]。

10. 竹内十次郎（J.テニング）

1929年(昭和4年)，福間領事に詰め腹を切らされて公職を辞した慎也は，農業経営と鮭の日本輸出に精を出す。甥の茂志氏によるとダイヤ印の吉田商会を設立して日加貿易を行なっていた，とのことである。当時の日系会社の中に“吉田商会”という会社はBC州内には見当らない。たぶん横浜か東京に設立していたのではあるまいか。慎也は終生日本，カナダの二重国籍であった。日本で会社を設立することも可能だった。彼は頻繁に日本を訪れた。殆どが商用だった。その頃彼は“鮭大尽”と呼ばれていた。

1937年(昭和12年)頃，慎也はカナダから竹

内十次郎の遺骨を持って帰国した。

竹内の郷里である三重県桑名市萱町の法盛寺に埋葬した[51]。わざわざ竹内の遺骨を運ぶだけのことで帰国したものか，商用のついでに運んできたものか明らかではない。竹内十次郎の生涯を知ると，前者である可能性が強い。

竹内十次郎は元海軍主計少監（少佐）であった。1898年（明治31年）7月からロンドンに出張して軍艦購入費の経理を担当していたが，1904年（明治37年）11月17日に公金29万円（現在29億円に相当）を拐帯して行方をくらました。以後カナダ，マニトバ州に潜んで農場を経営していた。ロンドン在任中に不正取得したコミッションと，拐帯した大金の殆どは日本に還流し，時の海軍首脳部の政治資金になったといわれる。十次郎はイギリス人の妻と子女と共に26年間の潜伏生活に終止符を打ち，バンクーバーに現われたのは1930年（昭和5年）頃だった[52]。マニトバ潜伏中からJ.テニングという英語名を名乗っていた[53]。まもなく第一区漁者協会の幹事として採用される。彼の勤務ぶりは

> 呑めば仕事にならない，呑ませねば仕事をしない，呑ませれば際限がない[54]。

というように，謹厳実直な仕事ぶりとはおよそ程遠い有様だった。しかし英語での対外折衝は見事なものだったといわれる[55]。州政府や白人ユニオンとの折衝，訴訟関係での法廷弁論等では英国仕込みの流暢な英語で，日系漁者の窮地を何度か救ったといわれる。

十次郎がバンクーバーに出てきてスティブストンで仕事するようになった切っ掛けは何だったのか，二，三の説があるが，最も有力な推定は慎也との接点である[56]。その根拠は二人とも斎藤実に非常に近い存在であったことである。十次郎がロンドン在勤中，斉藤実は海軍次官で軍務局長，艦政本部長を兼ね十次郎直属の上司であった。慎也は斉藤実とまたいとこという親密な関係にあった。

> テニング爺さんが生きているあいだ，スティブストンの慎也のところへ，斉藤実から何度か手紙がきた。時の総理大臣からの手紙とあって，狭い漁師町で話題になる。
>
> 「なあに，この人は，わしとこで給仕をしておった」
>
> 塩鮭の大尽は，煙にまいた。斉藤実は同郷であり，1872年に胆沢県給仕として，水沢から後藤新平とともに上京し，海軍兵学寮に入っている[57]。

十次郎がバンクーバーに出てきた1930年頃は斉藤実は朝鮮総督として京城（ソウル）にいた。京城の斉藤実と慎也との間に密接なコンタクトがあった。慎也と親しかった阿部松之進が斉藤実を頼って朝鮮に行き釜山で商売をしていた[58]。これは慎也にとって斉藤実は，気軽に物事を頼める相手であった傍証といえる。阿部松之進は1921年頃は日本人会会長を務めていた。節を曲げない剛直な姿勢が，一部労働運動家グループの反感を買い，日本人会会長を辞め，カナダを去った。

十次郎はスティブストンで職を得た。日本領事館の推挽による他に，スティブストンの慎也の根回しがあって初めて可能だったといえる。日本領事館や慎也の背後に海軍の実力者，斉藤実朝鮮総督の影が見え隠れする。

十次郎は，英語ができることが唯一の取り柄で，気位の高い呑んだくれの老人だったといわれる。漁者団体や漁者協会の職員がもてあますようなことはしょっちゅうだった。そういう十次郎に毎月70ドルの給料[59]を払って家族の面倒を見たのは，斉藤実の依頼があったからと推察される。斉藤実には，十次郎に対してそうしなければならないような負い目があった。その負い目は公金拐帯事件にまつわる海軍首脳部全体に帰するものであったことは間違いない。

斉藤実は1932年（昭和7年）内閣総理大臣，1935年（昭和10年）内大臣と頂点をきわめたが，1936年（昭和11年）2月26日反乱軍に暗殺された。

その年の12月28日十次郎は健康上の理由で漁者協会幹事の職を退いた。明けて1937年（昭和12年）5月15日，十次郎はエッソンデイル精神病院で，波乱に富んだ67年の生涯を閉じた。

次男のロバートによると動脈硬化が直接の死因であったとのことである[60]。

慎也はその骨を抱いてはるばる太平洋をわたった。

11. 太平洋戦争の勃発

1941年（昭和16年）12月8日（現地7日），日本軍が真珠湾を攻撃して太平洋戦争の幕が切って落とされた。カナダ西海岸のあらゆる日系漁船がカナダ海軍によって接収され，ニューウェストミンスターに繋留された。やがて日本漁船処理委員会[61]が組織され，所有者の同意なしに売却処分された。

1942年（昭和17年）2月7日「戦時特別措置法」[62]が発動された。BC州沿岸の全日系人は市民としての権利を一切剝脱され，沿岸から100マイル以東への強制立退を命じられたのである。スティブストンも例外ではなかった。土地，家屋家財，漁船漁具等営々と築いた全財産を没収されて強制移動させられた。慎也はいくばくかの現金と手荷物だけで，夫人と共に強制移動の列に加わった。もちろん膨大な土地家屋等の動産，不動産は残したままだった。

カナダ日系人は過去に於て差別と排斥の苦杯をなめて来たという具体的な実例はいろいろあろうが，日系漁者程深刻な差別と迫害を受けて来た例は外にない。言うなれば日系漁者はカナダ在住の日系一同を代表して排斥され迫害されたのだと言っても過言ではない。日系漁者は戦前すでにその生活権である漁業ライセンスおよびそれに付随するほとんど過半数の権益を失っていた。そして太平洋戦争の勃発と時を同じうして，即ち1941年12月8日を以てカナダ太平洋沿岸における全日系漁者の所有する漁船はカナダ海軍によって押収され，日系漁者の「漁業」そのものに「終止符」が打たれた[63]。

スティブストンの全日系人は身の回りの手荷物だけでバンクーバー，ヘイスティング・パークに集められ，旧家畜倉庫の仮収容所に押し込められた[64]。ここから大陸奥地へ移動させられた。強制移動は10月末までかかったといわれる。それまで非衛生的で悲惨な生活が続けられた。この時西海岸から姿を消した日系人は20,881名となっている[65]。

その内42名の日本送還者がいた[66]。主として外交官であった。なぜか，慎也はその中にいた。夫人と一緒であった。甥の茂志氏によると慎也夫妻は日本領事館の特別の計らいで，野村吉三郎大使や来栖三郎大使等の乗った第一次交換船で帰国したとのことである。最初の交換船浅間丸は，グルー大使他416名と野村全権大使他787名とを，中立国ポルトガルの植民地東アフリカのロレンソマルケス（現モザンビークのマプート）で交換して，1942年8月20日横浜港に到着した[67]。

あれほど日系人のカナダ定住に情熱を注いだ慎也がどうして帰国の道を選んだのか。以下推測である。

1）1930年度以降も日本人への差別と排斥は益々激化し，しかも日系漁者を完全に排除する法的規制が強まったことで，鮭等の日加貿易の前途に不安を抱いたのではないか。

特に先見性の優れた慎也は，早くから日米開戦を予測し，カナダでの永住は困難との見通しを持っていたのではないか。東京に数箇所の土地家屋を購入していたこと（昭和12～3年頃と思われる），養女のキヨコを帰国させていたこと（昭和12年）等から推測される。この頃から日華事変の勃発，日独伊三国協定の締結等日本の国際的孤立が深まって行く。

2）日米の緊張が高まりつつある時，慎也は日本カナダ間を頻繁に往復していた。商用とはいえ，民間人の往来は厳しく制限されていた時期だった。当時同じ鮭の輸出業をしていた山本岩蔵は，郷里の和歌山県三尾に商用で帰ったまま，スティブストンには二度と戻れなかった。慎也は主として東日本地帯，岩蔵は西日本と，二人はテリトリーを協定して輸出していたのである[68]。慎也だけは特別であった。海軍とは斉藤実を通じて太いパイプがあった。海軍を通じて政官界の中枢にもコネができていた。日本海軍の練習艦隊がバンクーバーを訪れると，海軍首

脳は慎也の豪邸を宿舎とした。その首脳の一人に米内光政の甥もいた[69]。米・加両政府，軍関係者が，慎也は日本軍部と親交があり，協力関係もあるのではないか，という疑念をもったとしても当然である。現地の排日の気運と相俟って，慎也がカナダに永住しにくい客観情勢が醸成されつつあった。

3）郷古潔など，慎也と親交のあった財界，官界の有力者たちが，政府の抑留者交換リストに慎也を加えるように強力に運動した。慎也は心ならずも帰国せざるをえなかった[70]。

4）既に60歳の還暦を迎え，望郷の念も強まっていた。必死に努力して築いた財産も開戦で一切を失った。カナダに留まるには気力も萎え体力も衰えていた。カナダに託した夢が一挙に崩壊したのではないか。それに子供が無かった。スティブストンでの泉家から養女を迎えていた。養女キヨコは，1937年，ブリティッシュ・コロンビア大学卒業直後，日本語の勉強のため帰国した。1940年に同じカナダ出身二世の松崎氏と結婚して，開戦の頃は上海に住んでいた。晩年サウラ夫人はよく述懐していたという。“子供があればどんなに苦労してもカナダに留まっていました。”と[71]。

以上4点の推測のうちどれが真相か，判断はきわめて難しい。どれかというよりは，4点を総合したものが，帰国の動機ではなかったか。

帰国後東京都大田区久が原町に居を構えた。慎也宅には客が絶えなかった。軍首脳，財界・官界の要人であった。みな慎也の世話になった人たちだった。その中に水沢出身の財界人郷古潔，堂面味の素元社長，歌手の渡辺はま子等がいた。慎也ははま子の仲人であったという[72]。

戦時中，水沢へ疎開するよう勧める人もいたが，慎也は丁重に断った。空襲下，泰然として久が原で過ごした。カナダで全てを失った慎也にとって，もはや失うものはなかった。今更郷里に落魄の身をさらせるか，とポツリと洩らしたことがあったという[73]。武士としての矜持であった。

彼の終生の夢は，郷里水沢に工業学校を寄付することであった[74]。工業立国にふさわしい藩校立生館の復興であったのかもしれない。

戦後のインフレ昂進期は土地家屋を切り売りしてしのいだ。それでも親戚の子弟の教育には惜し気もなく援助を続けたという。最後に残った自宅と土地をも売り払い，近所に住む茂志氏の長女長谷川タヅ子の屋敷内を借りて20坪の小宅を建てた。そこで晩年を送った。夫人とお手伝いさんの3人暮しであった。お手伝いであった那須トシ子は次のように語っている。

“朝は6時半に起きて，奥さんとラジオ体操をして，新聞を読むのが日課でした。7時半の朝食後は散歩と読書で過ごし，12時にはきちんと食卓についていました。それはそれは時間には正確な方でした。猫を可愛がりました。猫やカナリヤの世話，読書，相撲観戦で午後を過ごし，6時半には夕食でした。カナダでの習慣を守り，テーブルには白布を掛け，膝にはナプキンを置いて食事を召し上がりました。背筋をのばし，よそ見をしない方でした。必要以外あまり話しませんでした。一見恐い方でしたが，5年間お世話になるうち一度も叱られたことがありません。9時にはお風呂に入って9時半のニュースを見たあとお休みになりました。私は21歳の時カナダにわたって結婚しました。カナダで会う人みな慎也さんを誉め讃えるので，誇りに思いました。

私は慎也さんに言われたことで今でも守っていることが一つあります。

「人と話をするときはよく考えてから話しなさい。」ということです。本当に立派な方でした。”[75]

1968年（昭和43年）5月10日，サウラ夫人と夕食後のデザートに苺を食べていた。苺にたっぷりと砂糖をかけて食べるのが，カナダ以来の習慣だった。急に胸の痛みを訴えた。日頃，痛い，痒いを顔にも口にも出さぬ人だった。長谷川家の人たちが駆け付けた。医者を呼んだ。手厚い手当ても虚しく，黙してその生涯を閉じた。享年86歳。善濤院積徳唯慎居士。慎也の生涯はまさに戒名のとおりであった。

サウラ夫人は友人知人に次のように報せた。

夫慎也儀，八十六歳の天寿を全うし五月十日午後十一時逝去致しました。

東京都大田区久が原町五百九十五番地
喪主　吉田サラ
外　親戚一同[76]

慎也の訃報に接した人たちはみなその人柄を惜しんだ。

山本岩一氏は慎也の思い出を語った。

“うちの親父がよく世話になりましたよ。それは立派な人でした。慎也さんのズウズウ弁の演説だけは困りました。何を言っているのか解らないんですよ。人柄風貌は殿様でした。いつもネクタイをして，悠然としていましたね。当時白人にまで一目置かれていたのは慎也さんだけでした。”[77]

また養女のキヨコも次のように偲んでいる。

“私の実母は養母サウラの親戚で江刺米里の出身なんです。父慎也の世話でカナダに嫁にきたそうです。養子関係といってももともと親戚なんです。

父は口数の少ない人で，とっつきにくいところがありました。昔風の侍みたいな人でした。家事など絶対自分ではやりません。いつも母か私でした。仕事も人を使って自分では手を下しません。生まれながらの殿様でした。スティブストンの自宅ではお手伝いさんや庭師，コックまで使っていたんです。まだあの大きな家が残っているんです。

戦後東京で一緒に暮らしたとき，交友関係の広いのにびっくりしました。北鎌倉の郷古潔さんのお宅や，堂面社長のお宅などにもしょっちゅう遊びに行ったものです。スティブストン時代には，堂面さんは味の素のシアトル支店長でよく家にきて泊まったものです。米内さんもよく見えました。”[78]

夫人はまもなく久が原の小宅を引き払い，杉並区松庵[79]に移った。そこで近親者と何年か過ごしたあと，昭和59年八王子の偕楽園ホームに入園した。入園中，カナダの旧友から，慎也の名がスティブストンの道路の名になったことを聞いて，声をあげて喜んだという。平成3年9月24日，104歳の天寿を全うした。

註

1．林林太郎「黒潮の涯に」，197～198ページ
2．吉田茂志氏，明治36年1月25日生まれ（90歳），水沢市新小路24の1に居住，留守家重職吉田権兵衛の嫡孫。吉田慎也の甥にあたる。カナダから帰国した慎也としばらく生活を共にした。平成4年11月6日午前11時頃訪問して，約2時間慎也についてお伺いした。
3．東水沢中学校PTA会報「しののめ」昭和55年3月14日号8～10ページに，同中学校長後藤重男氏と吉田茂志氏の対談がのっている。“学区の文化を理解しよう”—カナダ移民吉田慎也氏を中心に—
4．「しののめ」（前掲）
5．岩手県教育会胆沢郡部会「胆沢郡史」，154～155ページ
6．盛岡大学短期大学部紀要「カナダ日系移民史」第一部，68ページ
7．今野俊彦・藤崎康夫編著「移民史IIIアメリカ・カナダ編」172ページ
8．明治ニュース事典編纂委員会「明治ニュース事典VI」，明治33年4月21日付報知新聞より
9．鶴谷寿「アメリカ西部開拓と日本人」74ページ
10．長谷川タヅ子氏談，氏は茂志氏長女，東京都大田区久が原6-17-8に居住，慎也夫妻の晩年の面倒を見た。平成5年2月15日訪問面談。氏によると，渡米の費用も斉藤実の援助を受けた，と慎也自身が述べていたとのことである。
11．鶴谷（前掲）166ページ
12．Vancouver City／Victoria City and B. C. Directory, 1926～1927
13．大陸日報社編「加奈陀同胞発展史第一」153ページ
14．同書154ページ
15．同書155ページ
16．中山訊四郎編「加奈陀之宝庫」1,027ページ
17．盛岡大学短期大学部紀要（前掲）65～83ページ参照
18．大陸日報社（前掲）156ページ
19．中山（前掲）667ページ
20．同書675ページ
21．同書676ページ
22．同書679ページ
23．同書680ページ
24．同書682ページ
25．同書683ページ
26．同書691ページ
27．同書691～692ページ
28．林（前掲）95ページ
29．中山（前掲）692ページ

30. 林（前掲）100ページ
31. 同書101ページ
32. 中山（前掲）703〜704ページ
33. 同書705ページ
34. 林（前掲）104ページ
35. 加奈陀日日新聞社編「日本農業発展号」163ページ
36. 同書163ページ
37. 中山（前掲）726ページ
38. 同書718ページ
39. 同書730ページ
40. 同書733〜734ページ
41. 同書734ページ
42. 林（前掲）200ページ
43. 同書199ページ
44. 大陸日報社編「加奈陀同胞発展史第三」91ページ
45. 林（前掲）32ページ
46. 同書32〜33ページ
47. 加奈陀日日新聞社（前掲）166〜167ページ
48. 同書163ページ
49. スティブストンの三大豪邸の一つとして現存する。現在は某弁護士の所有
50. 林（前掲）198ページ
51. 佐木隆三著「波に夕陽の影もなく」171ページ参照
52. 同書182ページ参照
53. B. C. Directory（前掲），1930，1370ページには，“Tenning Jusan h 1053 W7”とある。
54. 林（前掲）210ページ
55. 佐木（前掲）170ページ参照
56. 山本岩一氏談，#21-4460 Garry St., Richmond, B. C., Canadaに居住，79歳，父親の岩蔵氏は慎也と同時期に，漁者団体役員でありしかも鮭の日本輸出も行なっていた。1993年3月8日訪問面談。“慎也さんは，のんべえテニングさんの面倒をよく見た。もともと慎也さんは人の面倒見のよい人だったよ。”
57. 佐木（前掲）172ページ
58. 吉田茂志氏談
59. 林（前掲）208ページ
60. 佐木（前掲）238〜239ページ参照
61. A Japanese Fishing Vessels Disposal Committee
62. The War Measure Act
63. 林（前掲）156ページ
64. 辻信一著「日系カナダ人」37ページ
65. 高田光子著「遠き旅路の声」174ページ
66. 同書175ページ
67. 木坂順一郎「昭和の歴史　7　太平洋戦争」178ページ
68. 山本岩一氏談
69. 松崎キヨコ氏談，氏は慎也の養女，現在2550 Courtenay, Vancouver, B. C., Canadaに住んでいる。1993年3月7日訪問面談。
70. 松崎キヨコ氏談
71. 長谷川タヅ子氏談
72. 那須トシ子氏談，氏は5年間慎也氏夫妻の晩年の家事の手伝いをした。サウラ夫人と同郷であった。2975 East 43 Ave., Vancouver, BCに住んでいる。1993年3月7日訪問面談
73. 長谷川タヅ子氏談
74. 吉田茂志氏談
75. 那須トシ子氏談
76. 那須トシ子氏保有のはがき
77. 山本岩一氏談
78. 松崎キヨコ氏談
79. 林林太郎氏保有のサウラ夫人からの手紙の住所。氏は二世の日系カナダ人である。戦中戦後の日系漁者の指導者であった。「黒潮の涯に」の著者としても有名。明治34年生まれの91歳。現在も3231 Garry St., Richmond, B. C., Canadaに居住している。1992年8月10日午後2時訪問。吉田慎也にかかわる事柄について約2時間面談。

参考文献目録

1．邦文

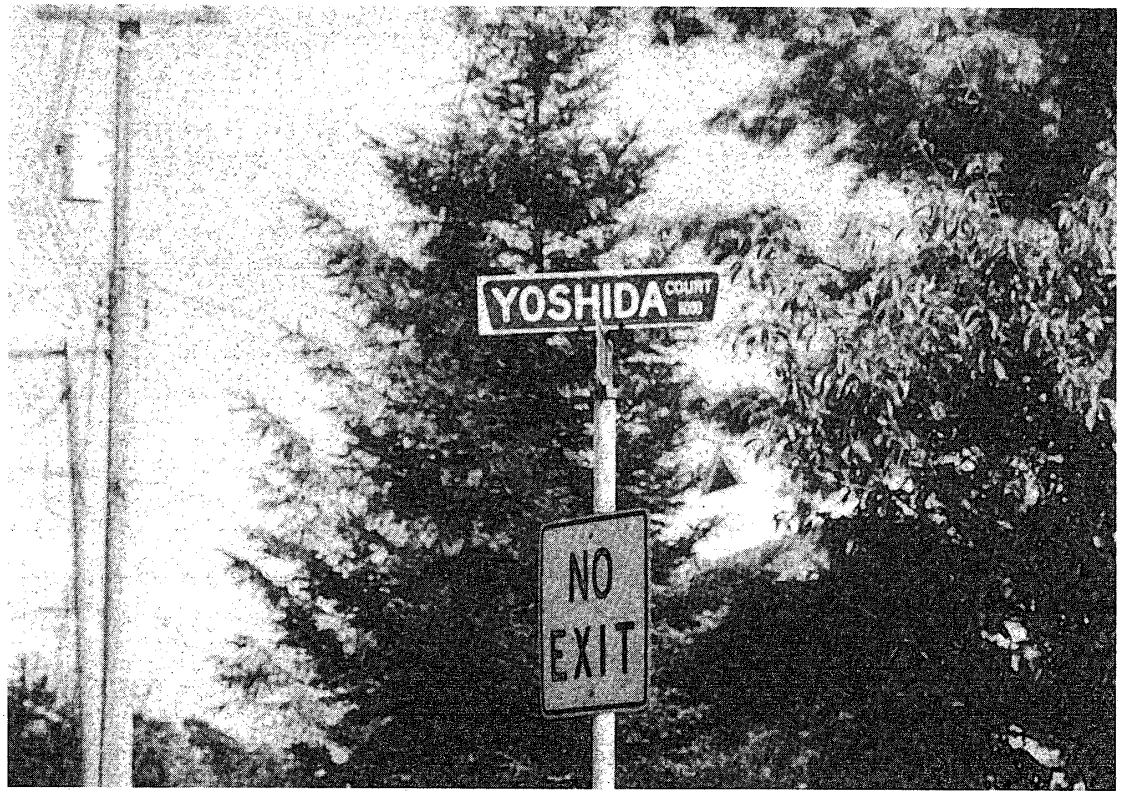
1）岩手県教育会胆沢郡部会　「胆沢郡誌」（復刻版）臨川書店，昭和61年
2）林林太郎　「黒潮の涯に」　日貿出版社，1974
3）鶴谷寿「アメリカ西部開拓と日本人」NHKブックス，昭和63年
4）鹿住一夫　「茫洋たる大国カナダ」　朝日ソノラマ，昭和53年
5）辻信一　「日系カナダ人」　昌文社，1990
6）高田光子　「遠き旅路の声」　朝日出版サービス，平成3年
7）新保満「カナダ日本人移民物語」築地書館，1986
8）今野俊彦・藤崎康夫　「移民史Ⅲアメリカ・カナダ編」　新泉社，1986
9）佐木隆三　「波に夕陽の影もなく」　中央公論社，昭和55年
10）井上靖　「わだつみ」（復刊）岩波書店，1991
11）大陸日報編　「加奈陀同胞発展史　第一，第二，第三」　大陸日報社（カナダ），1909〜1924
12）中山訊四郎編「加奈陀之宝庫」（自費出版），1921
13）加奈陀日日新聞社編　「日本人農業発展号」　加奈陀日日新聞社，1929
14）明治ニュース事典編纂委員会「明治ニュース事典Ⅴ〜Ⅷ」毎日コミュニケーションズ出版部，1985〜

15) 東水沢中学校 PTA 会報「しののめ」 昭和 55 年 3 月 14 日号
16) 盛岡大学短期大学部紀要 第 2 巻（通巻 15 号），平成 4 年 3 月 25 日
17) 水沢市立図書館 「留守家旧臣名簿」 昭和 46 年
18) 木坂順太郎「昭和の歴史　7 太平洋戦争」小学館，1982

2．英文

1) ROLF KNIGHT & MAYA KOIZUMI: A MAN OF OUR TIMES, NEW STAR BOOKS, VANCOUVER, 1976
2) DAPHNE MARLATT: STEVESTON RECOLLECTED (A Japanese-Canadian History), VICTORIA, 1975
3) Patricia E. Roy: A White Man's Province, UBC Press,Vancouver, 1989
4) Forrest E. La Violette: The Canadian Japanese and World War II, University of Toronto Press, 1948
5) Roger Daniels: Asian America, University of Washington Press, 1988
6) Gordon G. Nakayama: ISSEI, NC Press Limited, Toronto, 1984
7) Patricia E. Roy: A HISTORY OF BRITISH COLUMBIA, Copp Clark Pitman Ltd., 1989
8) KEN ADACHI: THE ENEMY THAT NEVER WAS, McClelland & Stewart Inc., Toronto,1991
9) W. PETER WARD: WHITE CANADA FOREVER, McGill−Queen's University Press, Montreal, 1978
10) Leslie J. Ross: Richmond Child of the Fraser, RICHMOND '79 CENTENNIAL SOCIETY, 1979
11) Toyo Takata: Nikkei Legacy, NC press, Tronto, 1983
12) Hugh W. McKervill: The Salmon People, Whitecap Books, Vancouver, 1967
13) Greater Vancouver Map Book, Westport Publishing Co. Ltd., 1992
14) Vancouver City／Victoria City and B. C. Directory, 1926～1938

Steveston の YOSHIDA C. T.



Vancouver に住む養女キヨコさん